

新潟市北区文化会館
専属劇団
「劇団北極星」

ワークショップ
リーディング

「瞼の母」

原作 長谷川 伸
台本 笹部 博司

2018.10.02

新潟市北区文化会館

はじめに

歌舞伎に「獨道中五十三驛（ひとりたびごじゅうさんつき）」という演目があるそうです。猿之助が復活させて、大爆笑だったと聞いています。

考え方としては、このアプローチで「瞼の母」を二人でやる。

不可能な状況を、勇猛果敢に挑んで乗り越えていって、最後にたどり着く。

そのプロセスで、観客もいつしか味方になって応援を始める。

基本的にリーディングで、具体的なセットも作らないでやってみたいと考えています。

すべては想像力で乗り切ってしまう。

しかし一か月の稽古でやるわけにもいかないと思っと思っていますので、まず波乃久里子さんとダミーの相手役で全部作ってしまう。その後七之助（？）さんが入って二日か三日で仕上げてしまう。

この場合は、何事もぶっつけが面白いのではないかと思っています。

「瞼の母」はセリフがしっかりしているので、ツボの部分では泣けると思っています。

やはり名作だと思います。

見えるものを最大限取り除くと、言葉の本質がより明確になって来るように思っています。

衣装もセットのすべて簡単な見立てで、それを反対に利用し、それを楽しみながら作っていくという精神で出来ないかと思っています。

ト書きを読みながらその人物になり、所作、動作、セリフの一緒にやりながら、他の人物にも瞬時になる。

子どもがいろいろと考えながら、ウルトラマンと怪獣を一人でやる、そのように考えていただけだと思います。

役割はアバウトに決め、その場その場は男女にこだわらず、臨機応変、変幻自在に振り替わる。

長谷川伸作

「瞼の母」

第一場

武州南葛飾郡金町の瓦焼惣兵衛の家。

惣兵衛の妹おぬい、餌を拾う鶏を小舎へ追い込むふりをして、それとなく外を見張っている。——こういう感じでしょうか。(とやってみせる)

子供たち、かくれんぼをして、遊んでいる。——こういう感じでしょうか。

下総の博徒突き膝の喜八と宮の七五郎、往来へ来て立ちどまる。

喜八、子供の一人を手招きし、なにか聞く。

子供、知らないと頭を振る。

七五郎「何ッ知らねえ。そんなことがあるか！」

この七五郎ってのはかなり短気です。

子供たち、恐れてどつと逃げていく。「ワァー」

喜八「七、またお株が始まった。それ見ろい。子供たちが怖がって、みんな逃げていってしまった」

七五郎「逃げていってもいいじゃねえか。尋ねる家はここなんだ」

おぬい、そつと母屋のほうへ行きかける。

七五郎「おお、娘さん」

おぬい、仕方なく立ちどまる。「はい」

喜八「金町の瓦屋さんで、惣兵衛さんは此方だね。惣兵衛さんにお目にかかりたい」

七五郎「惣兵衛というおやじをここへ出せ」

おぬい「兄さんは町内の方とご一緒に、お伊様へ参っております」

喜八「留守か。そうかい。して家にはだれがいる」

七五郎「半次が帰って来てるか、それを聞いてるんだい」

おぬい「半次兄さんならおりません」

おぬいってのは結構気が強いですね。

七五郎「白ばっくれるな」

喜八「七。そんなにいうな。相手は綺麗な娘っこだ。おとなしく云えよう」

喜八はまあ、大人ですね。

七五郎「だって、お前、図々しく、居ねえなんてぬかすからよ」

喜八「まあいいやな。娘さん。ここに手紙を書いてきた、これを半次に渡してくれ」
おぬい「でも、全く参って居りませんもの」

七五郎「まだあんなことをいってやがる」

喜八「今は居ねえかしれねえが、今にもここへくる筈だ。来たら必ず渡してくれ」

手紙をおぬいが受け取らないので、垣の中へ放り込む。

喜八「七。さあ行こう」

七五郎「そんなことより踏み込んだ方が、埒が早くあくじゃねえか」

喜八「べら棒め。俺たち名うての人間。やるなら尋常にやる方が立派でいい」

七五郎「そりや立派にやりにいが、手間を食うから俺あ嫌いさ」

喜八「来いよ。急ぐことがあるかい、袋の中の鼠じゃねえか」

喜八、七五郎去る。おぬい、見送り、手紙を拾う。

若き博徒、金町の半次郎、人を害して逃亡し、実家へゆうべから来ている。

その半次郎が、母屋から、用心して顔を出す。

半次郎「おぬい、おぬい」

おぬい「お、兄さん、出ちやいけないよ」

半次郎「今の声はだれだ。この辺の人らしくなかったが、——その手紙は俺にきたのか」

おぬい「見たことのない男がきて、これを抛り出して行ったんだよ」

半次郎「それならゆうべ話した兄弟分の番場のあにいだ。どれ、それを見せてくれ」

おぬい「そんな人じゃなかったよ。二人連れの厭な奴なの」

と手紙を渡す。

半次郎、はッとなる。

おぬい「どうしての兄さん」

半次郎「何。なんでもね」

手紙を抜かずにいる。

おぬい「ホホホ。兄さんは字が読めなかったねえ。それでそんな顔をしたのかい。あたしが読んであげようか」

半次郎「なあに、それには及ばねえ。用は大抵知れている」

とまあ、ありまして。

おぬいがひったくって披くと、「下総飯岡の身内のもので、俺の首を挙げに来た奴等がよこした、呼び出し状」

「兄さん行く気なの」「行くんだ」「待っておくれ」「とめてくれるな」

そこへ半次、おぬいの母親のおむらが帰って来る。

おむら「半次郎、お前どこへ行くのだい」

半次郎「おとおお袋か」

おぬい「おつかさん大変なことになったよ。これを見ておくれよ」

と手紙をみせる。

おむら手紙の文面に驚愕はすれど、抑えつけて・・・

おむら「半次郎、お前はまだ親不孝がしたりないのか。今さらの小言だけれど、おとつあんの死目にも会わず、家とは音信不通で永らくて稀に帰って来て一晩たつと、もうこんな騒ぎを始めるのか、お前は他国で斬ったはったの騒ぎをして、それでも足りずに生れ在所へ帰ってまで、血腥い騒ぎをしたいのか」

半次郎「済みません。だがお袋。好んでする勝負じゃなく売られてみれば男として買わずにや居られませんから」

おむら「バカ言ってるんじゃないよ。親兄弟に泣きを見せてそれが何の男なんだい。惣兵衛兄さんをご覧、親にも妹にも優しいよ。人様にだって親切だ。それでこそ男といえるんだ。

お前のはただ強がって、面白くも無鉄砲で、斬るの突くのと喧嘩をしたり、仕事といえば遊びくらし、ばくちを打つばかりじゃないか。そんな奴が何で、男だなんていえるんだい。今度帰ってきたのが幸い、もう決して外へは出さない。惣兵衛が帰ってきたら、あの子とよく相談して、お前を真人間に叩き直し、常陸の叔父さん処へ預けるつもりだ」

おぬい「そらご覧、だからあたしが言ってるんだ」

半次郎「俺も堅気にはなりてえ、でもこうやって呼び出しをかけられちゃ」

おむら「まだ云ってる。どうでも行くなら、親を殺してから行くがいい。半次郎、家の中におはいり」

半次郎「ええ」

おむら「おはいりったら入るんだ」

日が次第に昏くなり、歌声がどこから聞こえてきます。

——ぶしを松戸で、芽を柴又き、小岩慕えで、真間ならむ。

さて、いよいよ番場の忠太郎の登場でございます。

人目を忍び、立木隠れに素早く進み、垣の外に立って様子を伺います。

——こういう感じでしょうか。(とやってみせる)

おぬいが鶏を小舎に入れ終り、母屋へ入ろうとします。

忠太郎「あ、もし。だしぬけなのにびっくりさせたか。勘弁してくれ。お前はおぬいさんだね。

垣の内に入り、竈を縦に往来から見えぬようなポジションを取る、と・・・

忠太郎「ゆうべこの門口まで一緒に来た忠太郎っていう男の事を、兄さんははなさなかつたか」

おぬい「いいえ半次兄さんなら、家へは来ておりません。よつぼど前に勘当されて」

忠太郎「おっと。その事なら知っている、どうでヤクザになる奴は、親があれば大抵感動だ。おぬいさん、兄さんにちよいと逢わせてくれねえか、ほんの二言三言で用は済む」

おぬい「いえ、半次郎兄さんは来ていません」

忠太郎「そんな筈があるものか。ゆうべ俺が勧めて、ここまで一緒に来たのだから」

おぬい「居りません居りません居りません。本当に兄さんは居ないんです」

忠太郎「疑うのはもつともだが、俺が——といってもお前さんには初対面、疑うのも兄貴を思う心からだ。半次の奴め、情愛のある妹をもつて、羨ましい奴だな。

母親のおむらが話声を聞いて、母屋から出てきます。

おむら「不幸者の半次郎にご用のあなたは、どちらの方でございます」

忠太郎「お袋さんでございますか。手前は忠太郎と申しまして、こちらさまの半次さんとは、深い訳のある者でございます」

おむら「お前さんも半次郎を、探しておいでなさいましたか、半次郎は勘当して、人別からねのけた不幸な奴、私共へは一向に寄りつきません。ご用でしたら他を探してくださいませ」

と、ここらはしばらく忠太郎とおむらの押し問答がありまして、忠太郎は、ここを去る決心をいたします。

忠太郎「お邪魔しましたお袋さん、妹さん、番場のちゆたろうは只今限り、半次郎さんと縁切りでござんす。ご免なさんせ」

おむら「え、聞き分けてくださいましたか」

忠太郎「親のねえ子は人一倍、赤の他人の親を見ると、羨ましいやら妬ましいやら。おさればでござんす」

そこに半次郎が障子を開き駆け出てきます。

半次郎「あにい——あにい」

忠太郎「半次か——堅気になれ。よ、よ」

と忠太郎は去ります。

半次郎「あにい——とうとう、行っちゃたか」

おぬい「兄さん、もうきょうから本当に堅気になってくれるんだろうねえ」

半次郎は忠太郎のことを思って、忠太郎が去っていったほうに向かって頭をさげます。

半次郎「あにい——す、すまねえ」

おむら「半次郎や、今の人は親なし子かい」

半次郎「え？ 忠太郎あにいのことか。あの人は五つの時に母親と、生き別れをしたんだぞうだ」

おぬい「おとつあんもないらしいね」

半次郎「十二の時に死んだぞうだ」

おぬい「じゃあ一人きり、兄弟は」

半次郎「それもねえと云っていた」

おむら「そうかねえ——可哀そうに、淋しい気がするだろうねえ——でも、おっかさんはどこかにいるのだろう」

半次郎「江戸にいるという噂だけで、居所が知れねえのだ、それに肝腎の名前だって、あにいはいはうれ憶えなんだ。尋ね探しても、判るかどうだか」

今度こそ、堅気になる決心をした半次郎ですが、そこへ喜八と七五郎が戻ってきます。

そしてその後からは忠太郎が見え隠れについて来ています。

こういう感じでしょうか。

喜八「七、なにがあっても声を出すな」
七五郎「うむ、判ってる」

喜八は障子の外から、中の様子を伺い、七五郎は、時々、往来の方を振り向き、忠太郎はその都度隠れます。

喜八「確かに野郎いるぜ」

七五郎「そうか。踏ん込もう」

喜八「婆あや娘に血迷って傷をつけたといわれるのは厭だ、野郎をここへ呼び出してやっちまおう」

七五郎「娘だつて婆あだつてついでにやる分には仕方がねえじゃねえか」

喜八「いよいよとならばその場次第、だれを斬ってもかまやしねえが、なるため評判のいようにしとかなないと、それだけ俺たちの出世が遅れるからなあ」

七五郎「相変わらずお前は軍師かぶれが強いなあ」

喜八「当り前よ。何をするにも、軍略兵法という奴は大切だ。でなくて、親分の株にありつけるものかい。七、そろそろ始めようか」

七五郎「金町の半次、さあ出てこい。飯岡身内が尋ねて来たぜ」

忠太郎は籠の脇に潜みます。

障子の内では、駆け出そうとする半次郎を、おむら母子が止める音がします。

喜八と七五郎は左右に別れ、足場をはかつて待ち受けます。

障子が開いて、半次郎が出てきます。

おむらとおぬいは、半次郎にすがりついています。

——こういう感じでしょうか。

半次郎「お袋も、妹も、諦めて放してくれ。やい来やがったはだれだ」

喜八「飯岡身内の突き膝の喜八だ」

七五郎「宮の七五郎の声をわすれたか。出てこい」

おむら「お前さん方、堅気になる気になった倅に、喧嘩を売るのはよしてください」

おぬい「後生です——後生です」

喜八「喧嘩？ 冗談じゃねえ。喧嘩じゃねえ、もう少し理屈のついてることだ」

七五郎「去年の二十三夜の晩に笹川の繁造が殺された。その仕返しだといやあがって飯岡の親分が、旭の町から帰りがけに斬ってかかりやがったのは、半次、手前と旅人の番場の忠太郎の野郎じゃねえか」

喜八「二人ともやにつこい腕前だから、親分は僅かなかすり傷、友蔵、金四郎は死んだが、あとの三人はびんびんしてらあ。その敵討ちの役を買って出て来た俺たち二人だ。半公、

さあこつちへ出てこい」

七五郎「愚図愚図するとそこへ飛び込み、婆も娘も一緒くたに叩きさるぞ」

半次郎「聞く通りあいつ等が、とても刀を鞘へおさめっこねえ。命をとるかとりられるか、そうする外に途がねえんだ。やい、手前たちも男なら、お袋や妹には何もするなよ」

喜八「ぐずぐずいわずに、討たれに木やがれ」

半次郎は、母子を振り切って前へでます。

おむらとおぬいは、泣きつつ、相より相抱いて、母屋の軒先で、がたたが震えています。そこでどんびしやりと登場するのが番場の忠太郎でございます。

忠太郎「喜八、七五郎、こつちを向けい」

七五郎「何だと。やっ忠太だな」

半次郎「おおあにい！」

おむらとおぬい共に驚きながら一縷の望みを得て喜ぶ。

——ちよつと難しいですね。こういう感じでしょうか。

喜八「こいつは一石二鳥という手で、飛んだ拾い物になりそうだ。手前たち二人俺たちも二人、一騎打ちだ、威勢よくやろうぜ」

忠太郎「一騎打ちなんぞさせるものか、二人一緒にかかって来い」

七五郎「生意気が野郎だ。手前から先にねむせてくれらあ」

七五郎は、忠太郎に斬りかかり、喜八は半次に斬りかかります。

半次はどうも喜八よりも腕が落ちるようすです。

おむらとおぬいは気が気ではありません。

でも、一方忠太郎は最初の一太刀で七五郎を斬り倒します。

これで七五郎はご臨終です。

そして忠太郎は、今度は喜八の向かいます。

喜八は形勢不利と見て、身をひるがえし、垣を破り、往来にでます。

喜八「やい。手前たちにはまた改めて逢うぞ。覚えてやがれ」

忠太郎「もう逢う用はねえやい」

忠太郎は、「それ来たッ」と七五郎の落して脇差を投げます。

すると喜八が、のびあがつて倒れます。なんと忠太郎の投げた脇差が胸に刺さっています。それで喜八はご臨終です。

その後、おむらとその二人の子供とのやりとりがありました。

忠太郎「そうだ。お袋さん、字を知ってるなら俺の手を取り、いう通りの文句を書かしてはくれませんか」

おむら「おお訳もないこと。なんと書いたらいいのです」

とおむらは忠太郎の筆持つ手を取ります。

忠太郎「一つ、この人間ども、叩つ斬つたる者は江州阪田の郡番場の生れ忠太郎。

忠太郎はそう繰り返しいつつ、書かせてもらい、次第にほろりとなり、落涙します。

おぬい「忠太郎さん、どうしなされた」

半次郎「あにいに似合わねえ涙をこぼして。ど、どうしたんだ」

忠太郎「お袋さん笑ってやっておくんなさんせ。五つの時に母親と生き別れをして忠太郎は、こうしていると母親に、甘えてでもいる気がするのをございんす。想い出して恋しさに、時々、忠太郎は、この——面に青髭のある年になっても、餓鬼のように顔も知らねえ女親が恋しい——恋しいのでござんす。

おぬいは、こらえかねて咽び泣きます。

先ほどの場が序幕、そして今度はいきなり大詰に参ります。

時間は前の場面より、一年と半月ばかり経っております。

前の場が春で、今度は秋や深き頃でございます。

場所は柳橋の料理茶屋水熊の横手――

黒板塀右手寄りの水熊の台所の出入口、左手より白壁の土蔵――

おとら、五十余歳、夜鷹が出来なくなって困窮している水熊の女主人の元の知人、破れた番傘を担ぎ、うしろ向きに水熊の台所口に立つ。

――こういう感じでしょうか。

お詣りに行く芸者三吉、およつ、相合傘で通る。

三吉、口三味線で何かおよつに移している。

およつ、首を振って節を繰り返している。

三吉、気がついて傘の外に手を出す。

三吉「あら、やんでるわ」

三吉、傘をつぼめる。

およる「ああら、お天道様が顔を見せてるじゃないの」

と言いながら、続けて唄を繰り返す。

三吉、傘で指を弾き拍子をととり、口三味線をつづけ、およつと共に去る。

魚屋熊、同じく北、めいめい天秤で荷を担ぎ、およつと擦れ違ふ。

魚北、振り返って、拳固で鼻を鳴らす。

魚北「ちえッ、業平様のお通りに気が付きゃがらねえ」

魚熊「そんな面の業平は当節はやらねえ」

無頼漢の素旨の金五郎が酔っ払って現れる。

魚熊、いやいや頭を下げる。

魚北もいやいや頭を下げる。

二人はさっさといなくなる。

水熊の板前善三郎が、迷惑そうに金五郎の後についている。

金五郎「おい、善公、ほんとにおかみさんは、居ねえのか」

善三郎「居ねえよ。でもさっきのような話はやめてくれ」

金五郎「後家の女に、俺が婿にはいろうってんだ、なにが悪い」

善三郎「金五郎さんはまだ三十を幾つもでねえ。家のおかみさんは年より十も十五も若く

見えたところで五十を越してるんだ」

金五郎「年なんざどうでもいい。俺あこの家が——色恋に年があるもんか」

善三郎「この話はあとだ。今日はこれで左様ならだ」

金五郎「うむまた後でくらあ」

おとらが突き飛ばされて、傘を手放し、倒れ伏す。

水熊の洗い方藤八、腹を立てて内から出る。

藤八「やいやい、しつっこ過ぎるから突き出したんだ、さつさと失せろ」

善三郎「どうしてんだ」

おとら「何をしやがるんだ。何だ失せろだと、失せてやるから失せるようにしろ」

藤八「まだそんなことをぬかしやがるか。おかみさんは留守だというのが判らねえか、よしんばいたところで、乞食婆に会う用はねえ、帰れ」

金五郎はまだいます。で、金五郎は藤八に聞きます。

金五郎「おい藤公、おかみさんは」

藤八「お留守です」

金五郎「そうか。じゃ本当に留守なんだ」

おとら「そつちになくてもこつちに用があるんだ」

金五郎「何をいやがる。おかみさんは留守なんだ。邪魔だ、どきやがら、この婆あ」

と金五郎は、おとらに八つ当たりをして突き飛ばします。

番場の忠太郎の登場です。

新しい番傘を手に、新しい下駄を穿き、通りかかって土蔵の前に佇み、その様子を見ている。

金五郎の行為に、義憤を感じその後ろ姿を睨みつけます。

——こういう感じでしょうか。

藤八「だから言わねえこつちやねえ。帰らねえから、そんな眼にあうんだ」

おとら「お前も殴つ気か。この年寄りを往來中につっこばしたうえに悴みたい年のくせして、まだ殴つ気なのか」

藤八「よしッ、殴ってやらあ」

そこへ出前持ちの孫助、出入口から覗き見して見えています。

忠太郎は出てきて、おとらを庇います。

藤八「おや。手前はその婆の倅か」

忠太郎「何で年寄をいじめるんでござんす。厭な真似はしねえもんだ。お婆さんどこも痛めはしねえか」

おとら「体のふしぶしが痛くって、困っちゃう」

ここで出入口から覗き見していた孫助が、出てきて口を出します。

孫助「藤さん、あの婆は東両国で、いつも売れ残りの夜鷹の婆だよ」

藤八「ほう。あの年で夜鷹。へええ」

おとら「ああ夜鷹だ。それを知っているとこをみると、お前はあたしの客だったと見えるね」

孫助「冗談いうな。俺はいつでもお福かお竹にきまつて・・・」

とここまで孫助は言つて、後は気まり悪げに内に引つ込みます。

孫助の出番はこれでおしまいです。

忠太郎はおとらが夜鷹だと聞いて、少し引きますが、気を取り直して、聞きます。

忠太郎「おめえ、年はいくつだね」

おとら「年？ 兄さんや年を聞いてどうするだね」

忠太郎「五十一か、それとも二、三か」

おとら「そんなところかも知れないさ。年の次は名を聞か。大抵のおきまりだ」

ここで忠太郎は藤八をきつと睨みつけます。

芝居の進行上、邪魔なんですな。

で、藤八はそれに圧されて、引つ込みます。

それを見届けて、忠太郎は、おとらに銭をやりませう。

忠太郎「手を出しな」

おとら「兄さん、おまえさん——」

忠太郎「おっと、俺の尋ねに返事をしてくれ、少しばかりだが口のきき賃だ」

忠太郎「おめえ、大きな子がありやしねえか」

そう聞かれておとらはぐっときて、俯きます。

おとら「子かい」

忠太郎「あるの——おめえに」

おとらはシクシクと泣きだします。

忠太郎「思い出させて泣かせてしまった——婆さん、そこ子はどうしているね」

おとら「生きていると三十一だ」

ここで忠太郎はぐつと息を飲みます。

おとら「死んじまった」

忠太郎は、ほつと息をつきます。

忠太郎「そうか。飛んだことを聞いて悪かった。堪忍してくれあやまるぜ」

と忠太郎は行きかけますが、おとらが引きとめます。

おとら「兄さんちよつと待っておくれよ。お前さんは嬉しい人だ。夜鷹婆だ何だかんだと、立ち番の野郎までが唾うあたしに、よく今みたいなことをきいておくれたった。何年振りかで人間扱いをして貰った気がするんだ。どうも兄さん、有難う、忘れないよ」

忠太郎「そんな話を聞くのが、俺には毒だ」

とまた忠太郎は行きかけます。

おとらはまた引きとめます。

おとら「何だか訳がありそうだ。だれを探しているのだね。もしあたしが知っていたら、教えてあげたい気がするんだけど」

忠太郎「老いすがれた女の人を見れば、だれでも探している俺の——かと思うばかりで去年から、もう直き丸一年になろうというのに、縁がねえのかまだ会えねえ」

おとら「そりやだれに」

忠太郎「おめえぐらいの年の人さあ」

おとら「お袋さんだね」

忠太郎「そうかも知れねえ」

と忠太郎はまた行きかけます。

で、またまたおとらは引きとめます。

おとら「この家のかみさんも、あたしが知っている頃は、残して来た子供のことを三日にあげず泣いて話したが」

それを耳にして、忠太郎は「え！」と驚き、引返し、おとらに近づきます。

おとら「けれどもそれは、十年十五年じゃない、もっと昔の話なんだ」

忠太郎「ここは確か料理茶屋で、水熊とかいう家だろう。して、ここのかみさんが子供を置いて来たというのほどこだ。知っているなら聞きてえなあ」

おとら「古いことだろう憶えだけれども、確か江州だったと思うのさ。兄さんは江戸っ子らしいから江州では人違いだねえ」

忠太郎「俺あ十三から江戸で育ったが、生れは草深いところなんだ。ここのおかみさんは、そんなに子供を思っていたのか」

おとら「今も言った通り、そりゃ大昔の話だから、昨今はどうかわかりやしない。あたしの推量では、もう子供のことなんか忘れてしまい、思い出しもしないだろうねえ」

忠太郎「女親というものは、そういうものじゃねえ」

おとら「昔は随分仲好しで、世話になったり世話したり、姉妹同然にしていたんだが、この何年というものは、途中で会えば顔をそむけ、よんど困って訊ねてくれば、今のよう叩きださせる。人間という奴は月日が経つては駄目なものさ」

忠太郎「それはそうだが知らねえが、母子はまた別なもの、たとい何十年経ったとして生みの親だあ、子じゃあねえか、体中に一杯ある血は、双方ともにおんなじなんだ。そんなことがあるものか」

おとら「それじゃ一つ、行ってみるがいいかもしれない」

忠太郎「え？ まさか。ただ江州と聞いただけでは、いくら何でも、行けるものかな」

おとら「それもさそうだ。あたしも倅が恋しくなった。久しい間無沙汰してる、今から行って参ってこよう」

忠太郎「お墓詣りか。待ちな。お線香をお華をこれで。遠慮なく取ってくれろ」

おとら「こ、こりゃ小判だ」

忠太郎「一両出したとて怪しむな、俺あ盗人じゃねえ。見る通りのヤクザなんだ。汗をかいて稼いだ金じゃなし、出たとこ勝負、博打場の賽の目次第で転げ込んだあぶく銭だ。なろうことならお婆さん、糊売りでもして暮らしてくれろ。死んだ息子が安心するぜ」

おとら「はい」

忠太郎「あばよ」

と忠太郎は行きかけます。

おとらは、「はい」と振り返って頭を下げ去ります。

忠太郎はおとらを見送り、水熊の方を見ます。会ってみようか、いや止めておけ、と心が揺れますが、知らず知らずに歩き出します。

そこに藤八が孫助と出入口を開けて、覗きます。

まだあの野郎いやがるぜ、という感じです。

忠太郎、振り返ると、偶然、その二人と視線が合います。

二人は、舌打ちして引っこみます。

それを見て反対に決意がついて、とにかく尋ねてみようと出入口に足を向けます。

そこに芸者の三吉とおよつが話しながら、参詣から帰ってきます。

忠太郎、二人に振り返ってみられ、出鼻を挫かれ、立ち止まり、やっぱり立ち去ろうとします。

場面は変わって、水熊の女主人おはまの居間です。

右手は中庭、左手は廊下、部屋は明るくて派手です。

おはまは五十二歳、長火鉢に倚って煙草をのんでいます。

おはまの娘お登世、十八、九といったところ、は化粧がすみ、着物を着換えています。

中年増の女中おふみが小間使おせう（十四、五といったところ）を使っているると世話をやいています。

おふみ「ああいい。なんてよくうつるんだろう。ねえおかみさん、さうじゃありませんか」

おはま「うふふふ」

おふみ「本当に、あたしが男だったらうちやときやしませんよ」

お登世「やあだ。おふみじゃあたしが可哀そうでしょう。ねえおつかさん」

おはま「まあね。うふふふ」

小間使のおせうはうつとりとお登世を見惚れています。ふっと思いついて、自分の顔を鏡で見て、しかめつつらをします。

そして急にはっとして廊下の方を向きます。

おせう「あら喧嘩だわ」

おふみ「何をいつてるのさ。喧嘩をどこでしているのさ。脅かしちゃ厭だよ」

おはま「こりやおせうの耳の方が確かだった。どこかで喧嘩してるね」

お登世「どこで」

おふみ「あ、本当でしたねえ。おや家じゃありませんか」

おせう「見て来ましようか」

おはま「うっちゃやておおき。大所帯を張っていると内輪同士の争いは珍しくない、一々気に

とめていられるものかね。それよりかお登世、早く顔を出しといで。水熊のご馳走は一にお登世、二に料理と人様がおっしゃるくらいだ。早く顔を出しといで」

おふみ「まだありますよ、おかみさん」

おせう「あたし知ってる。家のおかみさんが年よか十も十五も若いことでしょう」

おはま「うふふふ」

お登世「じゃおっかさん」

おはま「あいよ。おふみ、気をつけてやっておくれ」

お登世とおふみは廊下の奥へ、おせうは残って片付けもの——口論の音がさつきよりも大きくなつてきます。

おはま「うるさいね。怒鳴ってるのは藤公だね」

そのうちに皿の割れる音がします。

おはま「おせう、行ってこうおいしい。いい加減にしろつて。喧嘩してる奴はみんなここへ雁首を揃えて来いって」

おせいは、「はあい」と言つて急いで駆けていきます。

入れ違いに、板前の善三郎が入つて来ます。

善三郎「ご免ください」

おはま「板前さん。またやつてるね。うるさいねえ」

善三郎「飛んでもねえ奴だもんですから、それでああがなりたてたので、もう片付きかけてますから。でもおかみさんがもしひよつと、何だろうとお思いなされた、お顔をお出しになると面倒だから、それを断りに出ましたんで」

おはま「頼まれたつて顔は出さないよ。また煮方と洗い方がトンガリっこをしんのから」

善三郎「きょうのは家の同士じゃございませぬ。相手はよその奴で」

おはま「何だというのさ」

善三郎「銭貰いですよ。おかみさんに会つて聞きてえことがあると、厭なセリフをいうしやありませんか。癪に障つたから剣呑を食らわしたところから、ついあんな大きな声をいたしましてんで」

おはま「さつきは知りしない婆さんが会わせてくれといつて来たそうだし、今度のは男なんだね」

善三郎「あつしは見ませんでした、さつき来た婆と、口をきいていたつているから、ど

うで東両国のこもつ張りの外で、さあさあざつとご覧よご覧よと囀ってる、夜鷹の立ち番でしょう。今すぐ追っ払っちゃいますから。

そこへおせうを先頭に、煮方死子之吉、洗い方藤八がやってきます。

善三郎「なんだなんだ、お前たちは」

子之吉「みんな来いと、おかみさんがおせうどんに云って寄こしたから、あの野郎には、時に弁州、孫と権、四人がかりで張り番させて来ました」

おはま「そいつはそんなに強情なのかい」

藤八「図抜けて大一番の強情者ですぜ。始めの内はねこなで声で、下から出てきやがったが、板前さんが叱りつけたら、間もなく本性を出しやがって、テコでも動きませんや」

善三郎「あんな奴は癖にならあ、番所に突きだしちゃえ」

おはま「静かにしておくれ。おせう、その人つてのをここへ連れといで」

善三郎「おかみさん、そりや止めたが」

おはま「そんな男の捌きがつけられないでどうなるものか。引っ張つといで、とちちめて帰らせてやるから」

おはまは言われたように、呼びに行きます。

おはま「みんな安心して引き取っておくれ。水熊の屋台骨を背負ってるあたしだ、男なんかに負けるものかね」

善三郎「そりや確かにそうだが、心配だなあ」

おはま「大丈夫だよ。見ておいで、その男は尻尾を巻いて帰って行くから」

子之吉、藤八が去っていった、最後に善三郎も行きかけますが、そこに番場の忠太郎がおせうに案内されてやって来ます。

忠太郎は善三郎の険しい視線も意に介さず、敷居の外に手を突きます。

おはま「中へ入って用があるなら云っておくれ、聞くだけは聞こう、だが、長ったらしいことは、あたしあ嫌いだ、断っておくよ」

忠太郎「ご免蒙りますでございませう」

忠太郎は敷居を超えて下手に坐ります。

おせうは廊下で立ち聞きしています。

おはま「さあ、何とか云わないのか。用があつて来たんだろう」

忠太郎「へえ、申しますでござんす」

おはま「なんだよ」

忠太郎「おかみさん——当って碎ける気持ちで、失礼なことをお尋ね申しとうござんす。おかみさんはもしや、あつしぐらいの年頃の男の子を持った憶えはござんせんか。ぶしつけとは重々存じながら、それが承りてえのでござんす」

おはまはびつくりして、一瞬、答えられません。

忠太郎「あつおかみさんは憶えがあるんだ。顔に出たその驚きが——ところは江州阪田の郡、醒が井から南へ一里、播鉢峠の山の宿場で番場というところがござんす。そのあつしは……」

おはま「番場宿なら知ってますとも、それがどうしたというのだね」

忠太郎「そこに、おきなが屋忠兵衛という、六代つづいた旅籠屋をござんすか」

おはま「ああ知ってる段か、あたしが若い時にかたづいてことがある」

忠太郎「おつかさん」

おはま「何だいこの人は、変な真似はおしでない」

忠太郎「ご免なさい、撫しつけでござんした」

おはま「お前さんは一体だれだね」

忠太郎「忠太郎でござんす」

おはま「何をいうんだ。忠太郎だって？——あたしには生き別れをした忠太郎という子はあつたが、今ではもう亡くなった」

忠太郎「えつねえ。無えのでござんすか——五つの時に縁が切れて二十余年。もうちつとで満三十年だ。その間音信不通で互いに生き死にさえ知らずにいた仲だから、そんな子はねえという気になっているのでござんすか、縁は切れても血は繋がる。切つて切れねえ母子の間は、眼に見えねえが結びついて、互いの一生を離れやしねえ、あつしは江州番場宿のおきなが屋の倅、忠太郎でござんすおつかさん。」

おはま「お待ちお待ち。お前さん、大層よく番場のことを知っているが、いくらあたしにそんな話をしたつて駄目だよ」

忠太郎「えっ」

おはま「成程あたしは美濃の加納の叔父の世話で、番場のおきなが屋へ嫁に行き、忠太郎という子を生んだ」

忠太郎「その忠太郎があつしなん——」

おはま「よくお聞きというんだ。そこ子が五つの時に、あたしやおきなが屋を出てしまつたんだ」

忠太郎「おやじはあつしが十二の時、わずらつて死にましたから、直に聞いたわけではねえが、おつかさんが家をでなざる時、おやじの身持ちがよくなかった、罪はおやじにあつ

たのだと、大きくなつてから聞いております」

おはま「可愛い子があるのだもの、去り状をとりたくないのが本心だったが、行きがかりが妙にこじれ、とうとうあたしの縁が切れた——その後つづいて永い間、江戸の空の下から江州は、あつちの方かと朝に晩に、見えもしない雲の下の番場の方を見て泣き暮らしたっけ」

忠太郎「五つといえばちったあ物も判ろうに、生みの親の佛を、思い出そうと気ばかり逸るが、顔にとんと憶えがねえ。何て馬鹿な生れつきだと、自分を悔やんで永え間、雲を掴むと同じように、手がかりなしで探している中に、おっかさんあつしも三十を越しましてござんす」

おはま「お黙り。お前はあたしの生みの子とは違っているよ。何をいい加減なことをいつてくるのだ」

忠太郎「えつ、ち、違つてる。あつしが忠太郎じゃねえのでござんすか」

おはま「名前は忠太郎かもしれないよ。生れた処も江州の番場塾かしかないが。

忠太郎「じゃやっぱりあつしは」

おはま「傍へくる凶凶しい奴だ。あたしのこの忠太郎は、七つの時、はやり病で死んでしまったと聞いている。死んだ子の数を数える親心で、生きていたらあの子も今年三十二、いや一だったと、ゆうべも夜中に目がさめて思い出していたくらいだ。お前がいくら何といつても、生みの母のあたしが見て、そうじゃないと思うのだから。お帰り。さつさと帰つたほうがためなんだよ。

忠太郎「九つの時に死にはぐれたことは、正にあつしも覚えています。死んだというのは間違いで、忠太郎はこの通り、生きています」

おはま「そんな手で這いこみはしないがいい」

忠太郎「這いこみ。そうか、あつしを銭もらいだとおもうのでござんすか」

おはま「それでなくて何だい」

忠太郎「違う違う違います。銭金づくで名乗ってきたのじゃござんせん。シガねえ姿ははしていても、忠太郎は不自由はしてねえのでござんす。(胴巻を出し百両を前に) 親を知らねえ母親に、縁があつてめぐり合つて、ゆたかな暮らしていればいいが、もしひよつと貧乏に苦しんででもいるのだつたら、手土産代わりにと心がけて、何があつても手を付けず、この百両はなげえこと、抱いてぬくめて来たのでござんす。見れば立派な大世帯、使つてゐる人の数もおびただしい料理茶屋の女主人のおっかさんはなつてるのかと、さつきからあつしは安心してたが、金が溜まっているだけに、何かにつけて用心深く、現在の子までつかまえて疑つてみる気になりてえのか、おっかさんそりゃ怨みだ、あつしは怨みますよ」

おはま「怨むのはこつちの方だ。娘をたよりに楽しみに、毎日毎日面白く暮らしている処へひよつくりと、とんでもない男が出てきて、死んだはずの忠太郎が生きています私ですと。お前、家の中へ波風を立てにきたんだ」

忠太郎 「そ、そりゃひどいやおっかさん」

おはま 「また、おっかさんなんて云うのか」

忠太郎 「おっかさんに違えねえのでござんす」

おはま 「お前の心はわかっているよ。忠太郎と名乗って出て、お登世へ譲る身代に目をつけて、半分貰う魂胆なんだ」

忠太郎 「ええッ！」

おはま 「(じつと忠太郎を見詰める)

忠太郎 「涙をぬぐうと決然と態度を一変する) おかみさん。もう一度あらためて念をおしますでござんす。江州番場宿の忠太郎という者に憶えはねえんでござんすね。おかみさんの生みの子の忠太郎はあつしじゃねえとおっしゃるのでございますね」

おはま 「そう——そうだよ。あたしにや男の子があつたけれど、もう死んだと聞いているし、この心の中でも長い間死んだと思つて来たのだから、今さら、その子が生き返つて来てもうれしいとは思えないんだよ」

忠太郎 「別れて永え永え年月を、べっこに暮らしてくると、こんなにまで双方の心に開きが出来るものか。親の心子知らずとはよく人がいう奴だが、俺にやその諺が逆さまで、これほど慕う子の心が、親の心に通じねえのだ」

おはま 「忠太郎さん」

忠太郎 「何でござんすか」

おはま 「もしあたしが母親だと言つたら、お前さんどうおしだ」

忠太郎 「それを聞いてどうするんでござんす。あつしにはわかっている。おかみさんは今穏やかに暮らしているのが楽しいのだ。その穏やかさ楽しさに、水も油もさしてもらいたくねえ——そうなんだわかつてらあ。小三十年も前のことあ、とうに忘れた夢なんだろう。親といい、子というものは、こんな風でいいものか。(百両を懐中にする)」

おはま 「それほどよく得心しているのなら、たつて親子といわないで、早く帰つておくれでないか」

忠太郎 「近い者ほど可愛くて、遠くはなれりや疎くなるのが人情なのか」

おはま 「だれにしても女親はわが子を思わずにいるものか。だがねえ、わが子にもよりにけりだ——忠太郎さん、お前さんも親を尋ねるのなら、なぜ堅気になつていないのだけ」

忠太郎 「おかみさん。そのお指図は辞退すらあ。親にはなれた小僧っ子がグレたを叱るは少し無理。堅気になるのはおそまきでござんす。ヤクザ渡世の古沼へ足も脛まで突つ込んで、洗つたつてもう落ちっこねえ旅にん癖がついてしまつて、何の今更堅気になれよう。

よし、堅気で辛抱したとて、喜んでくれる人でもあることか裸一貫たつた一人じゃございませんか。ハ、ハ、ハ、ハ。儘よ。身のおきどころは六十余州の、どこといって決まりのねえ空の下を飛んで歩く旅人に逆戻り、股旅草鞋をすぐにも履こうか。だれだ。(障子をあける) 手前たちに聞かせる話じゃねえ。失せろ。行かねえか。(障子を閉める) 長え間のお邪魔でござんした。それじゃおかみさんご機嫌よう。二度と忠太郎は参りやせません——

愚痴をいうじゃねえけれど、夫婦は二世、親子は一世と、だれが云いだしたか、身に沁み
らあ」

おはま「忠太郎さん、お待ち」

忠太郎「耳にもいれず、廊下へでる」おかみさんにや娘があるらしいが、一目逢いてえー
ーそれも愚痴か。自分ばかりが勝手次第に、ああかこうかと夢をかいて、母や妹を恋しが
つても、そつちとこつちは立つ瀬が別個——考えてみりや俺も馬鹿よ、幼い時に別れた生
みの母は、こう臉の上下びったり合わせ、思いだしゃあ絵で描くように見えていたものを
わざわざ骨をおって消してしまった。おかみさんご免なんせ。(障子を閉める)

おはま「あ。(呼びかけて思いなおす)」

お登世、廊下の奥から何も知らずにくる。後ろにおふみがついてくる。

雨の音が聞こえる。

忠太郎とすれ違う。

忠太郎、お登世を見詰める。「よく似てるなあ」懐かしげに振り返りつつ去る

お登世もずっと忠太郎を見ている。おふみに聞く。

「だあれ、あの人」

おふみは首を振る。

お登世「おつかさんに似てやしない」

おふみはおもわず膝をうつ。「そうですね」

おはまが廊下へ出る。

お登世「あ、おつかさん、今の男の人だあれ」

おはま「お前、見たのかい」

お登世「ええ、ちよいと似てた。ねえ、おふみ」

おふみ、おはまに気兼ねして、「ええ」

おはま、涙ぐむ。

お登世「どうしたの厭なおつかさんね。おつかさん、おつかさんてば」

おはま「あい、あいよ」

お登世「あの人。いつかもおつかさんが話していた人じゃない」

おはま、涙をぬぐう。

お登世「江州の忠太郎兄さんじゃないの。でも、忠太郎さんは九つで死んだっていうから、
そんな筈はないんだけど」

おはま、嗚咽する。

お登世「あ、やっぱり兄さん、忠太郎兄さんだったの」

おはま、泣き咽ぶ。

お登世「兄さんだ兄さんだ。おつかさん、兄さんならなぜ帰したの、なぜ帰しちゃったの」
おはま「か、堪忍おし。おつかさんは薄情だったんだよ。生れたときから一刻だって、放

れたことのないお前ばかり可愛くて、三十年近く別れていた忠太郎には、どうしてだか情がうつらない」

お登世「厭。厭。おんなじおつかさんの子じゃありませんか」

おはま「だから堪忍おしとあやまつてるんだよ。あたしは男勝りといわれ、自分でもそう思っていたが、これで何が男勝りか、我ながら情けない気になっていたんだ」

お登世「おふみ、急いで兄さんと呼んであげて、ね、ね」

「ええ」とおふみ、もらい泣きしていたが、すぐに急いで去る。

おはま「お前の心に対してもおつかさんは恥ずかしい。思いがけない死んだとばかり思っていた忠太郎が名乗って来たので、始めの内は騙りだと思って用心し、中頃は家の身代に目をつけてきたと疑いが起り、終いには——終いにはお前の行く先に邪魔になると思いこんで、突っぱねて帰してやったんだが——お登世や、あたしやお前の親だけけれど、忠太郎にも親なんだ、二人ともおんなじに可愛い筈なのになぜ、なぜお前ばかりが可愛いのだらう」

お登世「家の身代なんか、兄さんにあげたっていいじゃないの。あたしは赤ん坊の時から可愛がられてきたのに、兄さんはきつとそうじゃなかったんでしょう」

おはま、泣きいる。

おふみ、引き返して来る。「もうダメなんでした。下足さんや出前さんにかけて行って貰ったのですけど」

おはま「そうかい。いいよ。今度はこちらから忠太郎を探し出して、どんなことをしても、もう一度親子三人であわなくちゃならない。おふみ、頭のところへ、だれか大急ぎで呼びにやっておくれ」

おふみ「はい」

お登世「あたし、みんなを指図して、もう一度兄さんを探させてみます」
急いで去る。

善三郎が廊下へ姿を見せる。

「おかみさん」

おはま「板前さんか、何」

善三郎「ご免なさいまし。さっきの野郎のことなんです」

おはま「あつ、見つかったの」

善三郎「へっ、さっきの奴のことですか。まだ、みつかりやしません、ご安心なさいましうまいことになりました。悪い野郎ですけどこんな時の役に立つ素盲の金五郎が、またやって来ましてね。この一件を小耳に挟むと、止めるのもきかずに飛び出しましたが、こちらが頼んだわけではなし、金五郎が勝手に買って出たのですから、おかみさんは高みの見物してれば後腐れなく片付きます。後腐れといえは金五郎の方だが、こやつはあつしの親分に口をきいて貰い、五両か十両で片づけます」

おはま「え、どうしようというのだい。忠太郎を見つけて一体どう・・・」

善三郎「そんな騙りは腕か脛の一本も叩き折り、二度と夜迷いごとをいってこねえようにすると云ってましたが」

おはま「え、そんなこと、いけないいけない」

善三郎「え、そいつは困った。金五郎の奴はたちの悪い浪人と一緒でしたが、そいつなら居所を知ってるって言ってましたが」

おはま「ああ、どんなことになるか知れやしない」

善三郎「困ったなあ。その浪人の奴が金五郎に三両で引きうけさせろとせがんでいたが、バラさなきやいいが」

おはま「駕籠をいわせておくれ。三枚だよ、あたしや直ぐでかけるんだ。お前さんも行っておくれ」

善三郎「え、え。参ります」

おはま、外出の支度をする。有り金を体につける。

雨が強く降り出す。

お登世力なく引き返してくる。

お登世「あら、どうしたの？」

おはま「お登世や、忠太郎が（囁く）」

お登世「（驚愕する）」

おはま「駕籠はまだかい。板前さん——駕籠はまだかい」と廊下へでる。

お登世、泣き崩れる。「お兄さん……」

荒川の堤。

前の場の夜が明けかかる頃。戸田の渡しに近き荒川沿岸の雨上がり。船頭歌がどこからか聞こえてくる。

「荒川船頭衆と、わたしの恋路、梶をとりとり、風任せ」

そこに駕籠に乗ったおはま、心も空にあせっている。

駕籠がもう一丁、お登世、こちらの心も川向うに飛んでいる。

再び船頭歌。

「春は世に出る。草木もあるに、わたしや枯れ野のきりぎりす。

二人の男が草むらから姿を見せる。

一人は素盲の金五郎、もう一人は鳥羽田容助。酒毒で顔に赤い斑点、武芸の心得あり気で、野卑な素浪人。

鳥羽田「おい。今の、あれは何者だ」

金五郎「何が、どうした」

鳥羽田「前後二挺、いずれも客は女であった」

金五郎「左様だったか、女ならもう少し早く来て見るのだった、惜しいことをした」

鳥羽田「忠太郎とか申す奴、まさか途中でそれはしまいな。もしそれでもすると、折角の三両が水の泡だ」

金五郎「心配するな。もうじきやってくる」

鳥羽田「確かに来ると決まったら、約束の金三両、手付の一両は貰ってあるから、残金二両、受け取ろう」

金五郎「やってもいいがお前、金は前取りしてあるからとて斬り合いになってうしろを見る気じゃあるめえな（と金を渡す）」

鳥羽田「痩せても枯れても鳥羽田容助、そんな真似はいたすものか。それよりそっちの方こそ大丈夫かな」

金五郎「俺も素旨の金五郎だ。これでも人の二人や三人は、叩ききったことのある男だ」

鳥羽田「人を斬った数なら決して人後に落ちぬ鳥羽田容助だ。草ばくち打ちの一人や二人、何の造作もないことだ」

金五郎「それ程造作もねえことを、三両仕事で引き受けるとは、お前もなかなか利巧だよ」

鳥羽田「拙者よりも利巧なのはそちらの方だ。何か弱みを握っている忠太郎をバラして、水熊に着せ、それをきっかけに入り浸る寸法と見て取った。色と欲と一度の手入れとはなるほど、ばくち言葉でいう尻目同、素旨とはよくつけた渾名だ」

金五郎「馬鹿にしなさんな」

鳥羽田「おお、もう、明けの星の光が薄くなった」

金五郎「違えねえ。もう朝だな。お、来たらしい、あれが左様らしいぞ」

鳥羽田「あいつが忠太郎。確かに左様だったら合図しろ。拙者、いきなりスッパリとやってやる。こんなことで手間を取るといかんものだ」

金五郎「いいとも。合図をするぜ、首尾よくねむらせたら、酒代は一両」

鳥羽田「そいつはありがたい」

金五郎、鳥羽田は草むらに潜む。

番場の忠太郎、粹な旅人姿、提灯を持ってスタスタと。
空がだいぶ明るくなる。

忠太郎、気配を感じて提灯のあかりを吹き消す。

鳥羽田、忠太郎の背後に迫る。

金五郎は、側面から忍び寄る。

忠太郎、鳥羽田が斬りこむのをかわし、金五郎が斬りこむのもかわし、立ち木を盾にとる。

金五郎、草むらに伏し、隙を狙う。

忠太郎「だれだ。何者だ。一人はブ職らしい、一人は浪人さんでござんすね。お前さん方あどなただ。何の訳あって不意打ちに、白刃を鼻っ先で光らせるのでござんす。あつしがだれだか、知ってるんでござんすね」

金五郎「知ってるともよ」

鳥羽田「番場の忠太郎という肚の悪い奴だ」

忠太郎「お前さん方はだれだ、どこの人だ。下総から来たのか、それ共、江戸か。返事はござんせんか——無いな——無いな。斬るぞ」

鳥羽田、冷笑しいきなり斬りかかる。「えい！」

忠太郎、鳥羽田を斬り捨てる。

金五郎、狡猾に草むらに潜み、刀を避け、隙を伺って刺さんと企てる。

忠太郎、金五郎を探すが、逃げたと思ひ、血でぬれた刀を水溜で洗いかける。

おはまとお登世が、肩を落とし、しおしおと引き返してくる。

お登世、こらえかねて、すすり泣く。

おはま、慰め兼ねて言葉もなく、溜息をつく。

お登世「おっかさん」

おはま「え！」

お登世「縁がないってものは、こんなものなのかねえ」

おはま「あたしが、わ、悪かったからだよ」

忠太郎はそれをじっと聞いている。情けの思いよりも、反抗する思いが強くなって来る。

お登世「なんだかこの淋しいところに忠太郎兄さんがいるような気がしてならない。呼んでみようかしら。忠太郎兄さん——忠太郎兄さん」

おはまも力づいて一瞬、忠太・・・と呼びかけるが、どこにも答えがないので、みるみる力が抜けていく。

お登世とぼとぼと歩き出す。

「だあれもないだわ」

おはまもそれに連れ、悄然と歩き出し、二人とも消える。

忠太郎、母子を見送る。急にくるりと反対の方に向かい歩き出す。

忠太郎「おらあ厭だ——厭だ——厭だ——だれが会ってやるものか。おらあ、こう上下の臉を合わせ、じいっと考えてりゃ、遭わねえ昔のおっかさんの姿がでてくるんだ——それでいいんだ。逢いたくなったらおらあ、目をつぶろうよ」

金五郎、忠太郎を殺し、下手人を鳥羽田に塗り付け、おのれは水熊へこわもてで、入り婿になる計画を捨てず、鳥羽田の刀を拾って、忠太郎の隙を伺い、忍び寄り刀をぎし、今や

刺さんとする。

忠太郎、心づき、金五郎の退路を塞ぎ、じっと見つめる。

金五郎、捨て鉢になり、闘志がさかんになる。

忠太郎「どこかでおみかけした。ああ、思い出した。おめえの面はつきりと思いだしたぜ。

おまえ、親は」

金五郎「何だと。親だと。そんなものがあるものかい」

忠太郎「子は」

金五郎「ねえ」

忠太郎素早く金五郎を切り倒し、血をぬぐい鞘におさめ、すたすたと歩き出す。母子のさ
れる方を振り返りかけてやめる。

朝の真つ赤な光がさす。忠太郎、その光に背いて、股旅の路を踏み出す。

船頭歌が聞こえる。

「降ろうが照ろうが、風吹くままよ、東行こうと、西行こと」

終わり